

Title	"Imperial Gothic"としての黄禍論 H.G.Wells, "The Lord of the Dynamos"(1894)を中心に
Author(s)	橋本, 順光
Citation	The Victorian Studies Society of Japan Newsletter. 7 P.8-P.8
Issue Date	2008-05-01
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/27412">http://hdl.handle.net/11094/27412</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 特別研究発表

### “Imperial Gothic” としての黄禍論

H. G. Wells, “The Lord of the Dynamos” (1894) を中心に

横浜国立大学准教授 橋本 順光

19世紀末には、帝都ロンドンが植民地化の脅威にさらされる物語が数多く書かれた。Brantlinger は、それらの物語を “Imperial Gothic” とよんだが、同時代から流行しはじめる黄禍論とその物語もまた、同じ磁場にあるといつてよい。注目したいのは、これらの物語には、植民地からの逆襲だけでなく、文明が英国の手を離れ、変容してしまうことへの脅威が書き込まれていることである。三位一体であったはずの西欧・キリスト教・文明が揺らぎ始め、東洋を文明の亜種ないし「半開」にすぎないと一笑に付すなり、一蹴するなりできなくなった、ともいえるだろう。

ウェルズの “Lord of the Dynamos” (1894) は、そんな東洋への不安を凝縮した短編である。海峡植民地からロンドンへやってきた Azuma-zi が、発電機工場で主任の Holroyd に虐待されながら働くうちに、次第に三体の発電機を神として崇めはじめ、Holroyd を犠牲に捧げる。そして、次の犠牲を捧げようとして失敗した Azuma-zi は、発電機に飛び込み、感電死して殉教してしまうのである。文明化によって闇が回帰するだけでなく、ハイブリッドな怪物も生み出されるのではないかという不安が、この「もとも短命に終わった宗教」の物語には示唆されている。

したがって、Holroyd は、植民者の陰画としての要素を強くおびることになる。彼は技術者であるが、その発砲が落雷と勘違いされるロビンソン・クルーソーと異なり、崇拜されるのは発電機であって彼自身ではない。こうした植民者が失墜する姿には、キプリングの “The Man Who Would Be King” (1888) や、スタンレー（握手によって電気ショックを与え、アフリカでの崇敬を得ようとして糾弾された）との同時代性を指摘できるだろう。それは、シェイクスピアを読んでも、作者が化学に弱いということしかわからなかったという、スト破り Holroyd の人物造形（後にウェルズが愛憎半ばに描いたロウアー・ミドルクラス像の先駆でもある）からもうかがえる。

一方、Azuma-zi は、非西洋一般を体現する存在となっている。その発電機信仰は、当時よく知られていた “Juggernaut” の伝説と Tylor が提唱した animism（文中では “Fetich” が言及される）とを組み合わせたものであり、ほかの着想源としては *Erewhon* や高陞号事件などが考えられる。しかし、文明化が引き起こす自我の崩壊を、東洋人の内面から描いた物語は例がなく、特記してよいだろう。Imperial gothic の例にもれず、物語は植民者の敗退と怪物の自滅によって閉じられる。しかし、三体の発電機は、新たな怪物を生み出す脅威をはらんだまま、二人の手を離れて駆動し続ける。この結末が示唆するように、本短編の主題は、「短命」どころか、あまたの黄禍論の物語によって長く継承されることになるのである。